

本年の研修会は、岐阜県自然観察指導員連絡協議会と愛知県自然観察指導員連絡協議会との共催で8月20日(土)に岐阜県百年公園と岐阜県博物館に於いて開催されました。愛知県の参加者は20名、岐阜県は8名でした。岐阜県百年公園は、関市山田に1975年(昭和50年5月5日)に県設置100年記念として開園しました。開設面積100haの自然地形を利用し、四季折々に咲く花木が訪れる人々の目を楽しませ、様々な木製等の遊具を備え子ども連れが楽しめる公園です。

自然観察会は岐阜県百年公園で行われ、参加者を2グループに分け、岐阜県自然観察指導員会の千藤さん、井上さんにそれぞれのグループを案内していただきました。公園入口の駐車場周りはナンキンハゼ、モミジバフウの並木になっていて、昔はナンキンハゼの実から蠟を取った話や、モミジバフウの二年枝以後若枝にはコルク質の稜が見られる等の説明を聞きました。森の奥へ向かって右側の森裾では、ヤマボウシの色づいた実、アオハダ、ホウノの花を絵をつかって説明されました。自然のなかでは高木のため、花を見ることが困難であり、花をみるための配慮が嬉しかったです。

通路中央には谷川が設けられていて、水辺にデンジソウ(デンジソウ科デンジソウ属のクローバーに似た形の特異な形態のシダ植物)が群生しており、ここも「何も持ち込まない」が守られていないようでした。

脇道に入り、ヌルデの翼、キツネノマゴ、首を傾げたサジガンクビソウ、キンミズヒキ、ヒメカンアオイ(葉)、ヒヨドリバナ等の花を観察しました。さらに奥へ進み、カマツカの赤い実、クサギの花、イソノキ(コクサギガタ葉序)。カクレミノ(花と実)。タムシバ、シデコブシ(実)。サルトリイバラ等々約50種の植物とハグロトンボ、アオイトトンボ、シオカラトンボ等をつつくボウシとミンミンゼミの声を聞きながらの観察会でした。

昼食を挟み、博物館内を各自、自由に見学をしました。開催中の「蔵出し!骨のあるやつ」では、海の哺乳類の全身骨格、多くの化石等々を見学しました。

午後は、説田健一氏(岐阜県博物館学芸部自然系長)を講師に迎え、「あなたの知らない標本の世界」と題された講演会がありました。説田氏は大学時代にはオオキバハネカクシ等の甲虫を研究されていましたが、博物館への就職を機に、甲虫以外の動物も扱うことになったそうです。鳥の標本の中にトキの標本があり、岐阜県武儀郡嘉一村(現、関市)で捕獲されたものがあったそうです。この頃、学校から不要になった理科室の標本の処分の依頼をされるようになり、調べると授業に標本を使用することが無くなり、不要になったようです。自然史の標本は採集地、採集年月日等のデータがあることで価値が生じます。ところが学校標本の多くは採集データの無いことが多く、自然史標本としての価値はないのですが、人骨標本、カモノハシ、アホウドリなどの入手方法などを教材会社のカタログ(島津博物学標本目録)などを集め調べると、当時の主な教材会社として島津製作所標本部、山越工作所、池村標本製作所、京都科学などがあり標本製作が行われていたことがわかりました。当時は旧制中学などで授業に標本が使用されており、私のように標本を使っただけの授業を受けて無い者からすると、恵まれた環境であったように思われます。

明治から昭和初期にかけての標本の収集は金持ちのすることであったとのこと。有名などころでは、折居彪二郎などの採集者からの買い入れであったようです。

折居 彪二郎(1883~1970年)は、大英博物館の資料収集を手伝ったのを機に採集家となり、学者・研究者の依頼で明治から昭和初期にかけ、旧日本領の樺太・千島・満州・朝鮮半島から委任統治していたパラオ・マーシャル諸島など東南アジア一円で学術調査のための鳥獣採取に従事しました。(参考文献「柳原コレクション発見される」)

標本収集者としては、柳原要二(柳原コレクションの収集者)、山階芳磨(山階鳥類研究所の始祖)などがあります。柳原コレクションの一部(鳥類標本1521点)が平成11年に岐阜県博物館へ寄贈されました。



デンジソウ



カモノハシ



ライチョウ(冬)

